

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 9 月 13 日現在

機関番号：24601  
研究種目：基盤研究(B) (一般)  
研究期間：2019～2022  
課題番号：19H03937  
研究課題名(和文) 喉頭全摘出者のQOL向上へつなげる看護体制の構築：RCTによる縦断的介入  
  
研究課題名(英文) Construction of a nursing system leading to improvement in QOL of laryngectomized patients: Longitudinal intervention by RCT  
  
研究代表者  
小竹 久実子 (KOTAKE, KUMIKO)  
  
奈良県立医科大学・医学部・教授  
  
研究者番号：90320639  
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：【目的】Primary Outcomeは、情動的・心理的看護介入(面接群)のほうが情報提供のみ(対照群)と比較して、術前から退院3か月後までの喉頭摘出者の心理的適応とQOLが下降することなく維持向上できるのか、Secondary Outcomeは、退院1年後までの心理的適応とQOLが向上し続けることができるのかを明らかにすることであった。【方法】Randomized Controlled Trialを用いて対照群31例、面接群35例に分けて面接効果を検証した【結果】術前から退院3ヶ月後までの面接群の心理的適応とQOLは下降せず維持した。さらに、退院1年後まで向上し続けることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
本研究結果は、世界初の結果である。RCTにより、ガイドブックのみ対照群とガイドブックと面接看護介入の比較結果、退院3ヶ月後にQOL下降せず、退院1年後も術前よりやや上回る傾向がみられた。術前から継続的に看護者が面接をしながら一緒に患者と伴走する継続看護の重要性を示唆する結果であった。術前からケアチーム体制を整えて継続看護をする必要があり、各病院の特徴に合わせてチーム地勢を整える研究が求められる。

研究成果の概要(英文)：【Purpose】The primary outcome was to determine whether informational/psychological nursing intervention could maintain and improve the psychological adjustment and quality of life of laryngectomized patients from preoperatively to 3 months after discharge without decreasing it, compared to information. The secondary outcome was to determine whether the nursing intervention could continue to improve psychological adjustment and quality of life up to one year after discharge, compared to the informational intervention. 【Methods】The study design was a Randomized Controlled Trial intervention study using a guidebook and interviews based on the results of previous studies by the applicants, and a quantitative study. 【Results】The results showed that nursing intervention maintained their psychological adjustment and quality of life from preoperatively to 3 months after discharge without declining, and were able to continue to improve until 1 year after discharge.

研究分野：在宅看護学

キーワード：喉頭全摘出者 喉頭・咽頭がん 心理的適応 QOL 情報・心理的サポート RCT 看護介入 継続看護

## 1. 研究開始当初の背景

日本における口腔・咽頭・喉頭部がんの罹患数は、約 20,562 例であり (Hori. et al., 2015), 基準人口を 1985 年日本モデル人口とした場合、男性 15.2%, 女性 4.3% 程度であるが (全国がん罹患モニタリング集計, 2015), 下咽頭がんは、1983 年から 2011 年にかけて、9% から 21% へと著しく増加している (加藤ら, 2013)。喉頭摘出者 130 名を対象とした調査 (Kotake et al., 2017) によると、下咽頭がんおよび下咽頭食道がん 66.2%, 喉頭がん 16.2% であり、ステージ 期 79.2% にある進行がんの喉頭摘出者がほとんどである。その喉頭摘出者の退院前の状態として、永久気管孔の問題あり 46.7%, 嚥下困難 40%, 便秘 51.4% といったように、二人に一人の確率で日常生活において何らかの問題を抱えたまま退院する状態であり、問題は単独ではなく多重課題を抱えている (Kotake et al., 2017)。さらに、味覚・嗅覚の消失、不安・うつ、とじこもりなど Quality of Life (QOL) の問題がある (Troy et al., 2007, Maclean et al., 2009, Lundstrom et al., 2009, Dooks, 2012)。人との関係を断ち、家族とも交流しないで過ごしている方もみられ (小竹ら, 2006)、自分の存在価値を喪失している状態の喉頭摘出者がいる。特に、退院 3 ヶ月後に QOL が下降する傾向があることから、社会的に適応することへの困難さが窺える (小竹ら, 2018)。退院後の生活を見据えた継続的な看護介入の必要性があるが、継続的な介入は行われていない。本研究における Research Question は、術前から継続的な看護介入によって、退院 3 ヶ月後の心理的適応/QOL が下降することなく、維持向上する可能性があるのか、退院 1 年後まで、継続的な看護介入によって、心理的適応/QOL は向上し続けることができるのかである。

## 2. 研究の目的

Primary Outcome は、情動的・心理的看護介入のほうが情報提供のみと比較して、術前から退院 3 か月後までの喉頭摘出者の心理的適応と QOL が下降することなく維持向上できるのかを明らかにすることであった。Secondary Outcome は、情動的・心理的看護介入のほうが情報提供のみと比較して、退院 1 年後までの心理的適応と QOL が向上し続けることができるのかを明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

研究デザインは、今までの申請者らの研究結果に基づいて作成したガイドブックを用いた情報提供と面接を用いた Randomized Controlled Trial による介入研究であり、質問紙調査を用いた量的研究であった。

CONSORT (Consolidated Standards of Reporting Trials) のガイドラインに従いランダム化を行った。

対象数は近年、後頭全摘出術件数が大幅に減少している上に COVID-19 の影響を受けて 66 例の対象数であった。ガイドブックのみ配布する対照群 31 例とガイドブックおよび面接を定期的に行う介入群 35 例に分けて面接効果を検証した。調査内容は、心理的適応: 喉頭摘出者の心理的適応を測定する NAS-J-L 尺度、健康関連 QOL を測定する SF-36v2、インフォーマルサポートを測定する MOS (Medical Outcomes Study)、フォーマルサポートの HPSQ-25 (Hospital Patient Satisfaction Questionnaire-25)、基本的属性は、次の通り確認した。年齢、性別、家族構成、診断名、がんのステージ、手術名、リンパ郭清の有無、医師の観察による退院前の患者の健康状態 (嚥下・味覚・嗅覚・腕肩の可動域・皮膚の脆弱・気管孔の状態・便秘・浮腫の有無)、会話手段 (食道発声・電気喉頭・シャント発声・筆談・ジェスチャーの獲得状況と会話時間数)、社会復帰の有無、平均外出時間、患者会参加の有無と回数/月、現在の主観的健康状態 (嚥下・味覚・嗅覚・腕肩の可動域・皮膚の脆弱・気管孔の状態・便秘・浮腫の有無)。ガイドブックの重要さと満足度、ガイドブックと面接の重要さと満足度を確認した。分析方法は、次の通りである。Primary outcome と Secondary outcome については、基本的記述統計、反復測定分散分析と多重比較を行った。倫理的配慮として、A 大学医の倫理審査委員会において承認を得た (No. 2250)。

## 4. 研究成果

介入群と対照群いずれも平均年齢 69.8 歳であった。性別では、介入群の男性 88.2%, 対照群の男性 90% でありほぼ同じ比率であった。

Primary outcome の術前から退院 3 ヶ月後までの介入群の喉頭摘出者の心理的適応と QOL は下降することなく維持した (Table 1)。健康関連 QOL の PF では、退院 3 か月後に、対照群 29.7 点と比べて介入群 40.3 点のほうが高かった。RP では、退院 3 か月後に、対照群 24.5 点と比べて介入群 33.4 点のほうが高かった。GH では、退院前に、対照群 43.2 点と比べて介入群 35.6 点のほうが低かった。RE では、術前に、対照群 39.5 点と比べて介入群平均 32 点のほうが低かった。対照群よりも介入群のほうが、術前に RE が低く、退院前も GH が低い状態であったが、退院 3 ヶ月後には PF および RP が逆転して高くなり健康状態が改善していた。心理的適応は、不安・うつにおいて、術前に、対照群 71.8 点と比べて、介入群 58.3 点のほうが低かった。

Secondary outcome の介入群のほうが退院 1 年後まで心理的適応と QOL は向上し続けることが

できることを明らかにした。健康関連 QOL の PF において、介入群では、術前 (34.1 点) と退院前 (23.5 点)、退院前と 3 か月後 (40.3 点)、退院前と 6 ヶ月後 (38.5 点) に有意差があった。退院前で下降し、その後緩やかに上昇しながら退院 12 ヶ月では 40.3 点となり、術前より点数がやや上回る推移を示した。GH において、介入群では、術前 (40.4 点) と退院 6 ヶ月後 (43 点)、術前と退院 12 ヶ月後 (44.7 点) に有意差があった。退院 3 ヶ月後までは横ばい状態であったが、退院 6 ヶ月後からは上昇し、退院 12 ヶ月後では術前より点数が上回る推移を示した。VT では、介入群は退院前 (36.4 点) と退院 3 か月後 (44.7 点) に有意差があった。術前 (40.9 点) から退院前で下降し、退院 3 ヶ月後には術前より上回る点数となり、その後、退院 12 ヶ月後まで横ばい状態で維持した。SF では、対照群に術前 (42.5 点) と退院 3 ヶ月後 (30.8 点)、術前と退院 6 ヶ月後 (31.6 点) に有意差があった。退院 3 ヶ月後で最下降し、退院 12 ヶ月後も 35 点と横ばいのまま術前の点数まで至らず推移した。介入群は、有意差はみられなかった。MH では、対照群および介入群いずれも有意差はみられなかった。

心理的適応の不安・うつにおける介入群では、術前 58.3 点と退院 3 ヶ月後 73.2 点、術前と退院 6 ヶ月後 73.1 点、術前と退院 12 ヶ月後 74.4 点、退院前 55.4 点と退院 3 ヶ月後、退院前と退院 6 ヶ月後に有意差がみられた。術前から退院前までは 50 点台であったが、退院 3 ヶ月後から急上昇し、退院 12 ヶ月後も術前を 16 点以上上回る推移を示し、不安・うつが軽減された結果となった。

失声者に対する態度・自尊感情・自己効力感・障害の受容 (自覚・積極的肯定) では、両群いずれも有意差はみられなかった。

Table1. QOL(SF36スコア)・心理的適応・ソーシャルサポート得点(RCT)

介入群	術前		退院前		退院3ヶ月後		退院6ヶ月後		退院12ヶ月後		
	ガイドブック+面接	ガイドブック	ガイドブック+面接	ガイドブック	ガイドブック+面接	ガイドブック	ガイドブック+面接	ガイドブック	ガイドブック+面接	ガイドブック	
	n=34	n=30	n=31	n=29	n=23	n=21	n=27	n=21	n=20	n=20	
Q O L	身体機能(PF,N)	35.5 ± 18.0	40.0 ± 17.5	31.7 ± 17.0	30.9 ± 18.8	42.7 ± 12.7	30.6 ± 19.3	40.1 ± 16.6	37.8 ± 16.1	40.3 ± 13.2	36.9 ± 15.5
	日常役割機能(身体)(RP,N)	33.8 ± 16.1	39.2 ± 13.3			35.4 ± 15.5	25.5 ± 15.6	33.2 ± 15.9	34.5 ± 13.7	35.3 ± 14.8	33.7 ± 14.0
	体の痛み(BP,N)	43.4 ± 12.5	48.1 ± 10.0	43.3 ± 10.1	42.3 ± 9.6	46.5 ± 10.7	43.0 ± 10.3	47.2 ± 11.1	45.9 ± 10.1	46.2 ± 12.4	46.3 ± 7.5
	全体的健康感(GH,N)	41.4 ± 7.9	46.0 ± 9.2	40.0 ± 8.9	43.7 ± 9.3	41.8 ± 7.2	42.5 ± 11.1	43.8 ± 10.4	43.3 ± 9.1	46.5 ± 8.8	45.1 ± 9.7
	活力(VT,N)	43.7 ± 12.8	47.2 ± 9.5	41.2 ± 11.8	43.5 ± 10.8	47.7 ± 8.5	44.1 ± 12.4	46.0 ± 13.6	45.1 ± 12.8	46.7 ± 11.5	47.0 ± 10.6
	社会生活機能(SF,N)	38.2 ± 15.3	41.4 ± 11.6			34.0 ± 15.4	30.0 ± 15.5	35.0 ± 15.1	33.1 ± 16.5	38.6 ± 15.8	34.5 ± 14.8
	日常役割機能(精神)(RE,N)	32.4 ± 18.7	39.8 ± 12.1			36.8 ± 14.3	27.1 ± 16.2	34.6 ± 13.6	36.7 ± 14.4	36.0 ± 16.9	35.5 ± 14.5
	心の健康(MH,N)	38.7 ± 12.8	44.4 ± 10.9	39.0 ± 13.1	40.8 ± 9.7	42.3 ± 11.7	41.3 ± 12.4	44.3 ± 11.9	42.4 ± 11.2	46.1 ± 11.7	44.2 ± 9.6
	心 理 的 適 応	不安・うつ	60.1 ± 29.8	72.4 ± 21.0	63.8 ± 29.0	71.6 ± 21.1	76.5 ± 25.2	71.0 ± 23.8	75.4 ± 25.6	68.8 ± 22.6	78.1 ± 24.7
受容(自覚)				54.5 ± 23.3	48.2 ± 16.4	43.7 ± 27.5	47.7 ± 23.4	53.6 ± 24.3	41.2 ± 21.7	52.5 ± 25.1	50.5 ± 19.6
受容(積極的肯定)				59.1 ± 17.7	56.1 ± 14.7	56.9 ± 20.0	60.0 ± 19.6	61.1 ± 21.7	58.6 ± 16.7	60.4 ± 21.1	61.1 ± 21.2
態度		34.7 ± 18.8	44.0 ± 15.8	42.8 ± 24.9	42.2 ± 15.4	41.1 ± 25.7	47.7 ± 24.0	46.4 ± 32.1	47.6 ± 29.5	46.4 ± 26.2	47.8 ± 21.8
自尊感情		65.7 ± 23.8	67.0 ± 20.2	58.6 ± 31.6	66.4 ± 18.3	59.9 ± 26.8	61.0 ± 28.5	64.7 ± 25.5	57.4 ± 28.9	64.6 ± 25.1	66.2 ± 26.9
自己効力感		65.1 ± 20.8	59.3 ± 22.6	59.2 ± 22.3	56.6 ± 23.9	66.3 ± 23.3	60.1 ± 24.5	56.0 ± 28.9	65.7 ± 20.6	64.0 ± 25.3	61.8 ± 23.6
ローカスオブコントロール		57.4 ± 18.7	53.7 ± 19.6	62.5 ± 17.7	54.7 ± 21.8	60.1 ± 25.5	55.3 ± 17.3	51.4 ± 28.1	55.9 ± 16.6	53.5 ± 23.4	60.9 ± 16.4

Primary outcome と Secondary outcome は本研究によって検証された。退院 3 ヶ月後に QOL が下降する傾向は対照群のみに現れ、介入群は維持向上する結果であった。さらに退院 12 ヶ月後も介入群は退院後上昇し、術前を上回る結果が得られたことは面談を定期的に行うことの重要性を示唆している。心理的適応の不安・うつにおいても、術前では対照群 71.8 点よりも介入群 58.3 点と有意差がみられていたが、退院 3 ヶ月後には介入群は改善していた。このことは、身体的な健康状態が改善したということのみならず、面談によって心理的適応が促進されることが示唆されたといえる。

QOL および心理的適応は面談によって促進されることが本研究結果から明らかになった。今後は、術前から退院 1 年後まで面接フォロー体制を行えるケアチーム体制を構築し、定着させていくことが課題である。

本研究の限界は、当初、サンプルサイズ計算では 300 例の予定であったが、コロナの影響、手術の大幅な減少によりサンプルが少なかったことである。しかしながら、ランダム化により 2 群間で化学放射線療法やリンパ郭清の有無などの重要な影響因子に有意差がみられない状態であったことから因子を調整せずに比較分析が行えた。また、医師記録の無回答が多くあったことについて、退院前の健康状態を把握する限界であった。患者からの主観的回答と大きく異なる結果については、今後探究する必要がある。

## 文献

- Dodds AG, Bailey P, Pearson A, et al. Psychological factors in acquired visual impairment, The development of a adjustment, J Vis Impair Blind, 1991; Sep: 306 - 310.
- Dodds AG, Flannigan H, Liza NG. The Nottingham adjustment scale, a validation study, Int J Rehabil Res, 1993; 16: 177-184.
- Dodds AG, Ferguson E, Liza NG, et al.. The concept of adjustment A structural model, J Vis Impair Blind, 1994; Nov-Dec: 487-497.

- Fukuhara S, Bito S, Green J, Hsiao A, and Kurokawa K. Translation, adaptation, and validation of the SF-36 Health Survey for use in Japan, *J Clin Epidemiol*, 1998; 51(11): 1037-1044.
- Fukuhara S, Ware J E, Kosinski M, Wada S, Gandek B. Psychometric and clinical tests of validity of the Japanese SF-36 Health Survey, *J Clin Epidemiol*, 1998; 51(11): 1045-1053.
- 福原俊一, 鈴鴨よしみ. SF-36v2 日本語版マニュアル. 京都: NP0 健康医療評価研究機構: 2004.
- Hori M, Matsuda T, Shibata A, Katanoda K, Sobue T, Nishimoto H, et al. Cancer incidence and incidence rates in Japan in 2009: a study of 32 population-based cancer registries for the Monitoring of Cancer Incidence in Japan (MCIJ) project. *Japanese journal of clinical oncology.*, 2015; 45(9), 884-91.
- 小竹久実子, 佐藤みつ子. 喉頭摘出者のコミュニケーション方法の関係, *日看研会誌*, 2005; 28(1): 109 -113.
- 小竹久実子, 鈴鴨よしみ, 甲斐一郎他. 喉頭摘出者に対するフォーマルサポートの重要性-喉頭摘出者患者会会員の場合, *日看科会誌*, 2006; 26(4): 46-54.
- 小竹久実子, 鈴鴨よしみ, 甲斐一郎, 岩永和代他. 文部科学省・日本学術振興会 平成 19-20 年度科学研究費補助金 課題番号 19592580 基盤研究 (C)「ソーシャルサポートによる喉頭摘出者の心理的適応と QOL への影響に関する研究」, 2008.
- 小竹久実子. ソーシャルサポートによる喉頭摘出者の心理的適応と QOL への影響に関する研究. 平成 19 - 20 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C), 課題番号 19592580, 126, 2009. 小竹久実子, 鈴鴨よしみ, 岩永和代, 甲斐一郎, 高橋綾, 永松有紀, & 寺崎明美. 喉頭摘出者の心理的適応の経時的変化 術前から退院 1 年後まで. *日本看護科学学会学術集会講演集*, 31 回, 459, 2011.
- 小竹久実子, 鈴鴨よしみ, 甲斐一郎, 岩永和代他. 文部科学省・日本学術振興会平成 21-23 年度科学研究費補助金 課題番号 21592779 基盤研究 (C)「喉頭摘出者の心理的・社会的適応の経時的変化とソーシャルサポートの因果関係」, 2012.
- 小竹久実子. ソーシャルサポートによる喉頭摘出者の心理的・社会的適応の経時的変化と介入効果検証. 平成 24-26 年度 科学研究費補助金 基盤研究 (C), 課題番号 24593333, 26, 2015.
- 小竹久実子, 山田雅子, 鈴鴨よしみ, 岩永和代, 羽場香織, 高橋綾. 下咽頭がんによる喉頭全摘出者の退院 1 年後の生活のしづらさの実態, *聖路加看会誌: SLCN*, 2016; 1344-1922, 20 (1): 27-34.
- Kotake K, Suzukamo Y, Kai I, et al. Social support and substitute voice acquisition on psychological adjustment among patients after laryngectomy, *Eur Arch Otorhinolaryngol*, 2016; 29 Sep, DOI:10.1007/s00405-016-4310-0, March 2017, 274, 3, 1557-1565.
- Law IK, Ma EP, Yiu EM. Speech intelligibility, acceptability, and communication-related quality of life in Chinese alaryngeal speakers, *Arch Otolaryngol Head Neck Surg*, 2009; 135: 704-711.
- Lundström E, Hammarberg B, Munck-Wikland E. Voice Handicap and Health-Related Quality of Life in Laryngectomees: Assessments with the Use of VHI and EORTC Questionnaires, *Folia Phoniatr Logop*, 2009; 61(2): 83-92.
- Maclean J, Cotton S, Perry A. Dysphagia following a total laryngectomy: the effect on quality of life, functioning, and psychological well-being, *Dysphagia*, 2009; 24(3): 314-321.
- Matsuda A, Shibata A, Katanoda K, et al. Cancer Incidence and Incidence Rates in Japan in 2007: A Study of 21 Population-based Cancer Registries for the Monitoring of Cancer Incidence in Japan (MCIJ) Project, *Jpn J Clin Oncol*, 2013; 43: 328-336.
- Suzukamo Y, Ohbu S, Kondo T, Kohmoto J, et al. Psychological adjustment has a greater effect on health-related quality of life than on severity of disease in Parkinson's disease. *Mov Disord*, 2006; 21(6:7): 61-66.
- 鈴鴨よしみ, NAS-J (The Nottingham Adjustment Scale Japanese Version)に関する研究 - 心理的適応尺度の開発とその応用: 視覚障害者の場合 -, 厚生科学研究費補助金 特定疾患対策研究事業 平成 11 年度研究報告書; 2000. p.131-138.
- 鈴鴨よしみ, 熊野宏昭, 岩谷力. 視覚障害への心理的適応を測定する尺度 - The Nottingham Adjustment Scale 日本語版の開発 -, *心身医*, 2001; 41(8): 609 - 618.
- Troy D.Woodard, Agnes Oplatck, Guy J. Petruzzelli. Life after total laryngectomy - A measure of long-term survival, function, and quality of life, *Arch Otolaryngol Head Neck Surg*, 2007; 133: 526-532.
- 矢口久実子. 喉頭摘出者の心理的適応の特徴 コミュニケーション方法、ソーシャルサポート、術後経過年数との関係, *山梨医科大学大学院医学系研究科修士論文*; 2003: 19.
- 矢口久実子, 甲斐一郎, 佐藤みつ子他. 改変 Nottingham Adjustment Scale-Japan の喉頭摘出者に対する適用可能性, *日看科会誌*, 2004; 24 (1): 53 -59.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 小竹久実子	4. 巻 13
2. 論文標題 N:ナラティブとケア 質的研究のリアル-ナラティブの境界を探る「喉頭摘出者の生活のプロセス：術前と退院3か月後」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 遠見書房	6. 最初と最後の頁 89-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kotake K, Kai I, Iwanaga K, Suzukamo Y, Takahashi A.	4. 巻 276 (5)
2. 論文標題 Effects of occupational status on social adjustment after laryngectomy in patients with laryngeal and hypopharyngeal cancer	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Eur Arch Otorhinolaryngol.	6. 最初と最後の頁 1439-1446
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s00405-019-05378-9	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 栗田 麻美, 小竹久実子	4. 巻 7 (2)
2. 論文標題 わが国の訪問看護に関わる臨床判断研究のシステマティックレビュー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本在宅看護学会誌	6. 最初と最後の頁 62-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 熊谷 たまき, 小竹 久実子, 藤村 一美	4. 巻 15
2. 論文標題 看護師における特性的自己効力感尺度の方法因子を用いた因子構成の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪市立大学看護学雑誌	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Kotake K, Iwanaga K, Haba K, KuritaM, Ota I, SuzukamoY, Kai I et al.
2. 発表標題 The Preoperative Life Process of Pharyngeal and Laryngeal Cancer Patients Undergoing Total Laryngectomy
3. 学会等名 32th International Nursing Research Congress, 20-23 JUL. at on line (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kurita M, Kotake K
2. 発表標題 Nursing perspectives that Serve as the basis for Clinical Judgements of Visiting Nurse Focus on Nursing Care for Cancer Patients Receiving End-of-Life Care at Home
3. 学会等名 32th International Nursing Research Congress, 20-23 JUL. at on line (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yano M, Kotake K
2. 発表標題 Process of Becoming “Aware” in Visiting Nurses through Nursing Practice
3. 学会等名 32th International Nursing Research Congress, 20-23 JUL. at on line (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋綾, 小竹久実子, 甲斐一郎, 鈴鴨よしみ, 岩永和代 他
2. 発表標題 入院期間中に実践される喉頭摘出者の社会的適応を促進する看護援助
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kumiko Kotake, Kazuyolwanaga, Yoshimi Suzukamo, Ichiro Kai , AyaTakahashi , Kaori Haba, Yoko Ishibashi, MamiMiyazono, MamiKurita, Ichiro Ota, HirokazuUemura, Tadasu Kitahara, Hiromi Taniguchi, Sakae Matuoka, Naomi Mine
2. 発表標題 The Effect of Continuous Nursing Intervention by a Randomized Controlled Trial on Laryngectomized Patients' QOL
3. 学会等名 30th International Nursing Research Congress ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaori Haba , Kumiko Kotake , Kazuyo Iwanaga , Ichiro Kai , Yoshimi Suzukamo , Aya Takahashi , Yoko Ishibashi , Mami Miyazono , Mami Kurita ,Ichiro Ota , Hirokazu Uemura , Tadashi Kitahara , Hiromi Taniguchi , Sakae Matsuoka , Naomi Mine
2. 発表標題 Participation of Laryngectomized Patients in Self-help Groups and Their Motivations for Status Changes
3. 学会等名 30th International Nursing Research Congress ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwanaga K, Ishibashi Y, Ura A, Miyabayashi I, Kotake K, Haba K
2. 発表標題 The Study of Quality of Life Evaluation by using EORTC QLQ C-30 for Head and Neck Cancer Patients who Received Chemoradiation Therapy
3. 学会等名 23th East Asian Forum of Nursing Scholars ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iwanaga K, Ishibashi Y, Ura A, Miyabayashi I, Kotake K, Haba K
2. 発表標題 The Study of Quality of Life Evaluation by using SF36 for Head and Neck Cancer Patients who Received Chemoradiation Therapy
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science ( 国際学会 )
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kumagai T, Kotake K, Fujimura K, Sannomiya Y
2. 発表標題 The Examination of Reliability and Validity of a Japanese Version of the Oldenburg Burnout Inventory
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kumagai T, Kotake K, Fujimura K, Sannomiya Y
2. 発表標題 The Effect of Nurses' Sense of Mastery on Their Burnout and Mental Health
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 木下康仁編 小竹久実子、野口裕二、志村健一、小倉康嗣、宮下道夫、佐川佳南枝、稲毛和子、五味麻美、飯島聖香・片岡弥恵子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 105
3. 書名 ナラティブとケア 質的研究のリアル－ナラティブの境界を探る	

1. 著者名 日本応用心理学会、応用心理学ハンドブック編集委員会、藤田 圭一、古屋 健、角山 剛、谷口 泰富、深澤 伸幸	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 858
3. 書名 応用心理学ハンドブック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴鴨 よしみ  (SUZUKAMO YOSHIMI)  (60362472)	東北大学・医学系研究科・准教授    (11301)	
研究分担者	岩永 和代  (IWANAGA KAZUYO)  (40461537)	福岡大学・医学部・准教授    (37111)	
研究分担者	甲斐 一郎  (KAI ICHIRO)  (30126023)	東京大学・大学院医学系研究科(医学部)・名誉教授    (12601)	
研究分担者	羽場 香織  (HABA KAORI)  (90419721)	奈良県立医科大学・医学部・助教    (24601)	
研究分担者	栗田 麻美  (KURITA MAMI)  (00574922)	奈良県立医科大学・医学部・講師    (24601)	
研究分担者	高橋 綾  (TAKAHASHI AYA)  (70331345)	埼玉県立大学・保健医療福祉学部・准教授    (22401)	
研究分担者	石橋 曜子  (ISHIBASHI YOKO)  (70469386)	福岡国際医療福祉大学・看護学部・講師    (37130)	
研究分担者	原 頼子  (HARA YORIKO)  (60289501)	久留米大学・医学部・教授    (37104)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	新 裕紀子  (ARATA YUKO)  (10782055)	久留米大学・医学部・助教    (37104)	
研究分担者	太田 一郎  (OTA ICHIRO)  (00326323)	近畿大学・奈良病院・講師    (34419)	
研究分担者	上村 裕和  (UEMURA HIROKAZU)  (90285370)	奈良県立医科大学・医学部・准教授    (24601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関